

元岡・桑原遺跡群



九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・筑紫地区的キャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原及び、糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めていましたが、平成30年9月に文系4学部と農学部が箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転を完了しました。福岡市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区的移転跡地や西部地域のまちづくりなど、長期的・広域的な視点から引き続き対応を行っています。

統合移転用地内における事前発掘調査は平成7年度から福岡市が実施し、平成27年度までの約20年間に元岡・桑原遺跡群の発掘調査事業として66次に及ぶ調査を実施しました。これらの調査によって、旧石器から近代にかけて数多くの調査成果が上げられ、地域の歴史を語る上で欠かせない資料を紹介してきました。

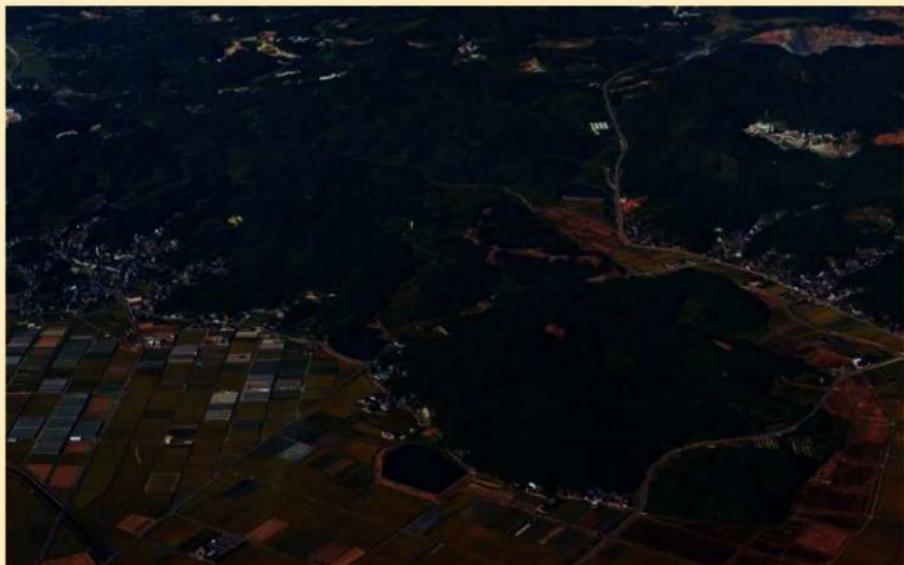
このリーフレットでは20年にわたる発掘調査・資料整理の成果

中から、特に重要な出土遺物について紹介します。いずれの遺物も元岡・桑原遺跡群の歴史を語る上で欠かせない資料です。

元岡・桑原遺跡群ではこれまでに国内最大級の古代の製鉄炉群や古墳時代の銘文入り大刀など、国内でも極めて重要な資料が出土しています。ここで紹介するのはそのほんの一部に過ぎませんが、九州大学の移転によって新たに分かった昔の人々の営みについて思いをはせてみたり、この元岡の地にもたらされた様々な文物のすばしさに興味を持たれてはいかがでしょうか。



元岡・桑原遺跡群の位置と周辺の遺跡・古墳



九州大学移転前の元岡・桑原地区。元岡・桑原遺跡群は中央の丘陵全体に広がっていた。(平成8年撮影)

旧石器時代・縄文時代

元岡・桑原遺跡群に人々が初めて姿を現したのは、旧石器時代が終わる頃（今から約3万年前～1万6000年前）のことです。この頃に人々が使っていた石器が発掘調査で見つかっています。

縄文時代の中期（今から約1万3000年前）の、石を集めた跡や、石作りの炉も見つかりました。

縄文時代の中頃から後半にかけて、当時の海岸に貝塚が作られました。元岡貝塚は今でも大学の近くで見ることができます。



→旧石器時代の終わりに、初めて元岡・桑原遺跡群に来た人々が使っていた石器。黒曜石でできていますが、表面が白っぽくなっているのは風化によるものです。左端の石器は棒の先に付けて使うもので、右端の石器はナイフの一部です。



→縄文時代の最初ごろの土器。表面の模様は、棒に糸を巻きつけて転がして付けたものです。このごろの土器には棒に型を形って押し付けた模様がいたるものもあります。

弥生時代

弥生時代の中頃（紀元前後）に丘陵の南側の谷で、大量の土器が捨てられていたことが42次調査で分かりました。

土器に混じって祭りの時に使われた木器や小型の銅鐸、琴なども見つかり、土器を捨てる時に祭りを行なっていたと考えられています。

土器の中には近畿地方や中国地方の土器、さらには朝鮮半島で作られた土器がありました。当時の人々は遠く離れた地域と盛んに交流を行い、文物をやり取りしていたと考えられます。

元岡・桑原遺跡群の南側には海が入り込んでいて、広い湾になっていました。その沿岸には鹿島海岸の材料の玄武岩産地だった今山遺跡や、大きな集落だった今宿五郎江遺跡や瀬地鋼鉄遺跡などの大きな遺跡があります。元岡・桑原遺跡群で出土した大量の土器は、湾のまわりで暮らしていた人々が持ち寄ったものかもしれません。



42次調査で見つかった、一面に広がる土器のかけら。
何個の土器が捨てられたのか、想像もつきません。



鳥の形の木製品。胴体の所の溝は、ひもを掛けた固定するためのものだと考えられます。

鳥は害虫を食べることから農耕の神の使いとされ、銅鐸にも描かれていますので、当時の人々はこの鳥の飾りを掲げて、豊作を神に祈ったのでしょうか。



ヒョウタンの形をした土器。上の口はすごく小さく、横が丸くくり抜かれています。とても実用的なものは思えない土器で、お祭りの時に使ったものかもしれません。似たような形の土器が中国にあるそうです。



↑元岡古墳群G-6号墳から出土した金象嵌銘文大刀、いわゆる「庚寅」銘大刀。全長74cmで、幅7mmの刀の背に5mmの大きさの文字を金象嵌で刻んであります。

弥生時代～42次調査出土遺物から

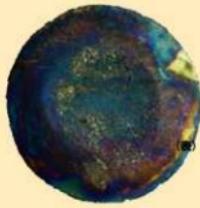


表面に円や直線で模様を描いた木製の円板（上）と、その復元図（左）。

古代の中国で、高貴な人の頭上に差し掛けるために使われたもので、「冠」とよばれるものです。表面は赤く塗られています。弥生時代の元周間にこれを差し掛けられたような、高貴な方がいらっしゃったのでしょうか？



（高）



42次調査で出土した小型の鏡。上の鏡は発掘直後は表面が紅色に光っていました。2000年前の輝きをとどめました。

右の鏡は真ん中のつまみの部分がわざと打ち抜かれ、穴を開けられたところも見られます。お祭りの中で、鏡を割るような儀式があったのかもしれません。

42次調査ではこのほかに3枚の鏡が見つかっています。



中国の貨幣。左の5枚は「貨泉」、右の1枚は「五銖錢」。

42次調査では9枚の貨幣が出土していますが、弥生時代の日本で1ヶ所の遺跡からこれほど量の貨幣が見つかることはほとんどありません。

水銀朱とよばれる赤色の顔料。この顔料を使うと光沢のある鮮やかな赤色が出来ます。弥生土器によく見られる「丹」はベンガラと呼ばれる国産の顔料ですが、この水銀朱は中国産と考えられています。ほんの1cm あまりの小さな粒ですが、大変貴重なものです。



左から、山陽地方の土器、出雲地方の土器、朝鮮半島の土器。どの土器も形やデザインに作られた地方の特色が見られます。土器や貨幣の他にもさまざまなものや文化が元周の地にもたらされたことと想像されます。



ています。象嵌とは金属の表面に溝を彫り、金銀や石をはめ込んで文字や模様を描く技法のことです。古墳から出土した金象嵌銘文刀剣では国内で3例目です。铭文の内容は前半が「庚寅の年の正月六日庚寅の日

古墳時代

古墳時代には元岡の丘陵の上に6つの前方後円墳が築かれました。それぞれの古墳からは鏡や土器などが見つかり、この地域をまとめていた人物の古墳と考えられています。

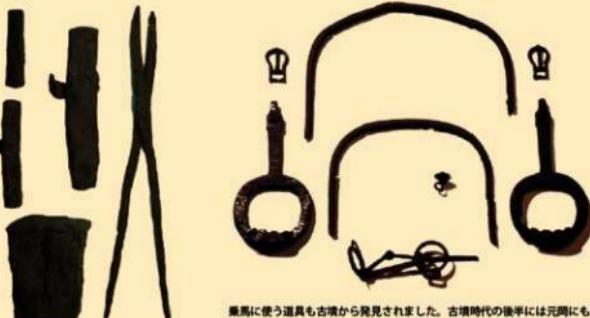
古墳時代の後半には、丘陵のあちこちで小型の円墳がまとまって作られました。その中には鉄器を作る時に使った道具がおさめられたものもあり、古墳を作った人々が鉄器づくりに関わっていたことが考えられます。

古墳時代の終わり頃、丘陵の南端にそれまでにないタイプの古墳が作られました。そのうち、元岡古墳群G-6号墳からは19個の文字が全部刻まれた刀が出土しました。古墳時代の金の鉢文刀劍は国内でも例が少なく、非常に重要なものです。

「『刀』を『鉢』から出土した時代は、石器時代はもはや古墳時代で、この刀は古墳時代の終わりをした時代に使ったものです。」



(左・中) 奈良県高市郡明日香村の秦原金原古墳で発見された2枚の鏡。秦原金原古墳は古墳時代の前期（4世紀）の前方後円墳で、2枚の鏡は葬られた人の頭の左右に置かれていました。ちなみに「かなくそ」とは铁津のこと。近くで製鉄をしていていたのでしょうか。
(右) 元岡E-1号墳で発見された鏡。元岡E-1号墳は古墳時代の前期（4世紀）に作られた前方後円墳ですが、その後壊されてしまいました。しかし鏡が埋まっていた所だけわずかに残っていて、奇跡的にほぼ無傷で発見されたものです。



馬に乗る道具も古墳から発見されました。古墳時代の後半には元岡にも馬があり、地位の高い人は馬を乗り回していたかもしれません。(奈原石ヶ元8号墳)

鉄器を作る時に使う道具。奈原石ヶ元12号墳から見つかりました。この古墳には葬られた人物が鉄器作りに大きく関わっていたと考えられます。



馬に装着する木製の鞍の部品も見つかっています。「座木」と呼ばれる部分で、この資料は国内最古級と考えられています。(18次調査)

→元岡古墳群G-6号墳で出土した大型の鏡。高さ12cmで国内最大級の鏡です。このような鏡も、馬につける飾りとして日本に伝えられました。



↑「大德庚正月六日庚寅日時作刀凡十二具緒」の19文字が、刀の背のこの部分に刻まれています。

「時に刀を作った」という意味ですが、後半は「十二本刀を作った」か「十二回絞めた」のどちらなのか確定できていません。「庚寅」の年は60年に一度巡って来ますが、「庚寅の年の正月六日」が庚寅の日。

奈良時代・平安時代

奈良時代には元岡・桑原地区の丘陵の谷あいに、製鉄炉が数多く作られていたことが発掘調査で明らかになり、合わせて大量の鉄滓（不純物のかたまり）が見つかったことから、大規模な製鉄作業を行なっていたことが分かりました。ここで作られた鉄は、大宰府や治土城の軍備のために使われました。

また元周では外国からの使者をもてなすために建てられた浦陸館の建物の瓦も作られていました。

この時代の遺跡からは、文字が書かれた木の札（木簡）や土器（墨書き土器）が見つかっています。また当時の役人が身に付けていた帯の金具や、墨書きをはかるおもり（墨模）も発見されていて、製鉄や瓦作りが国の事業として行われていたことも考えられます。



→椎面と呼ばれる、重さを測る時に使用するおもり。石や土で作られたものもありますが、これは陶製で重さは97g、6弁の花びらの形をしています。(決してカボチャ形ではありません。)



→土器に墨で文字を書いた、墨書き土器。「船手」「乙施」「常石田」「崎足」などの地名・人名や「某主」といった役職名がみられます。(20次調査)



「吉備守年元年」と書かれた木簡。「大賀（西暦665年）」は西暦101年にあります。(20次調査)



「三井守年元年」と書かれた木簡。西暦655年（5年）の木簡です。(20次調査)



「酒」と書かれたハンコ。いつ、どのような場面で誰が使ったのでしょうか。
興味を引かれます。(31次調査)

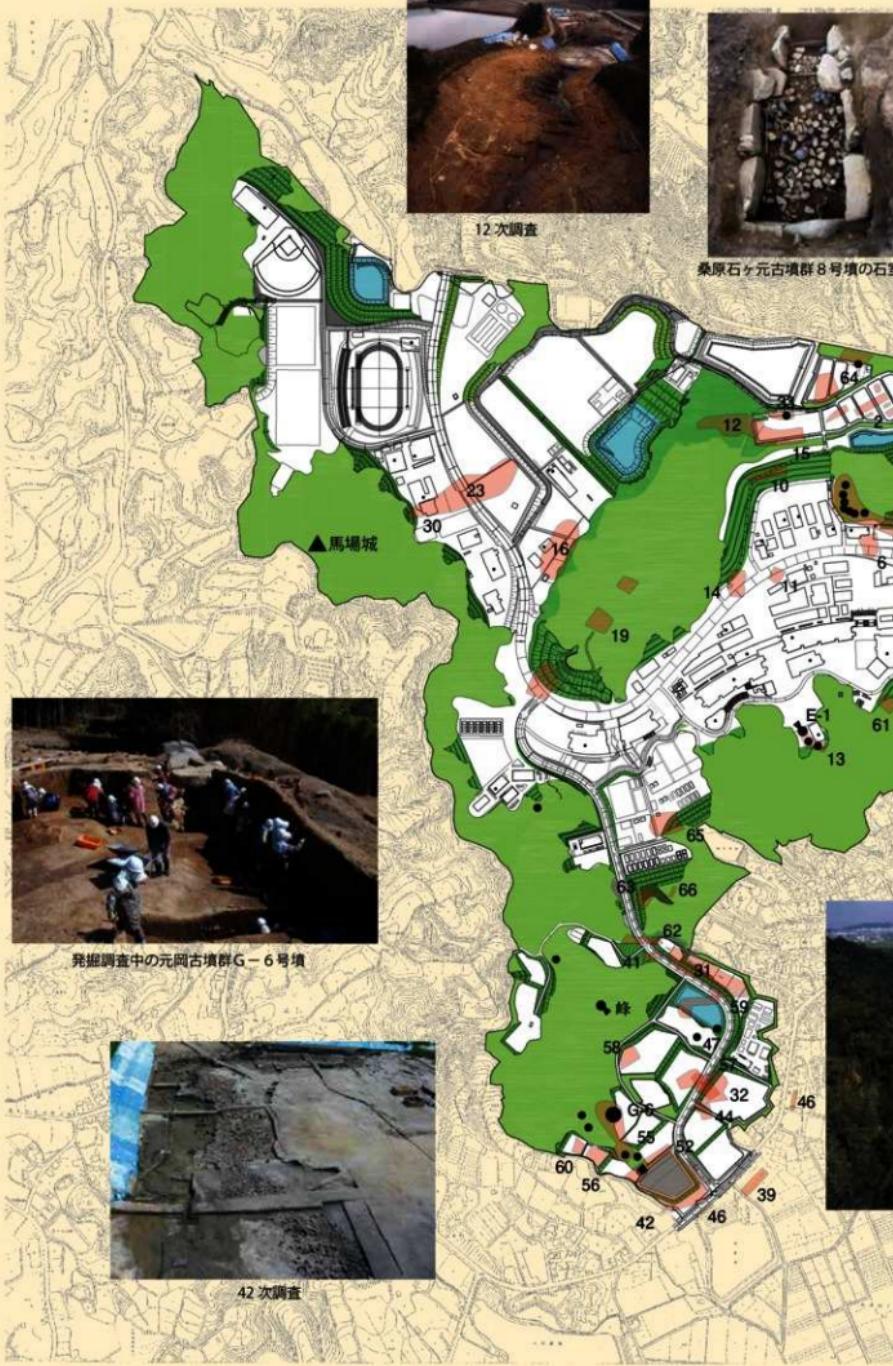


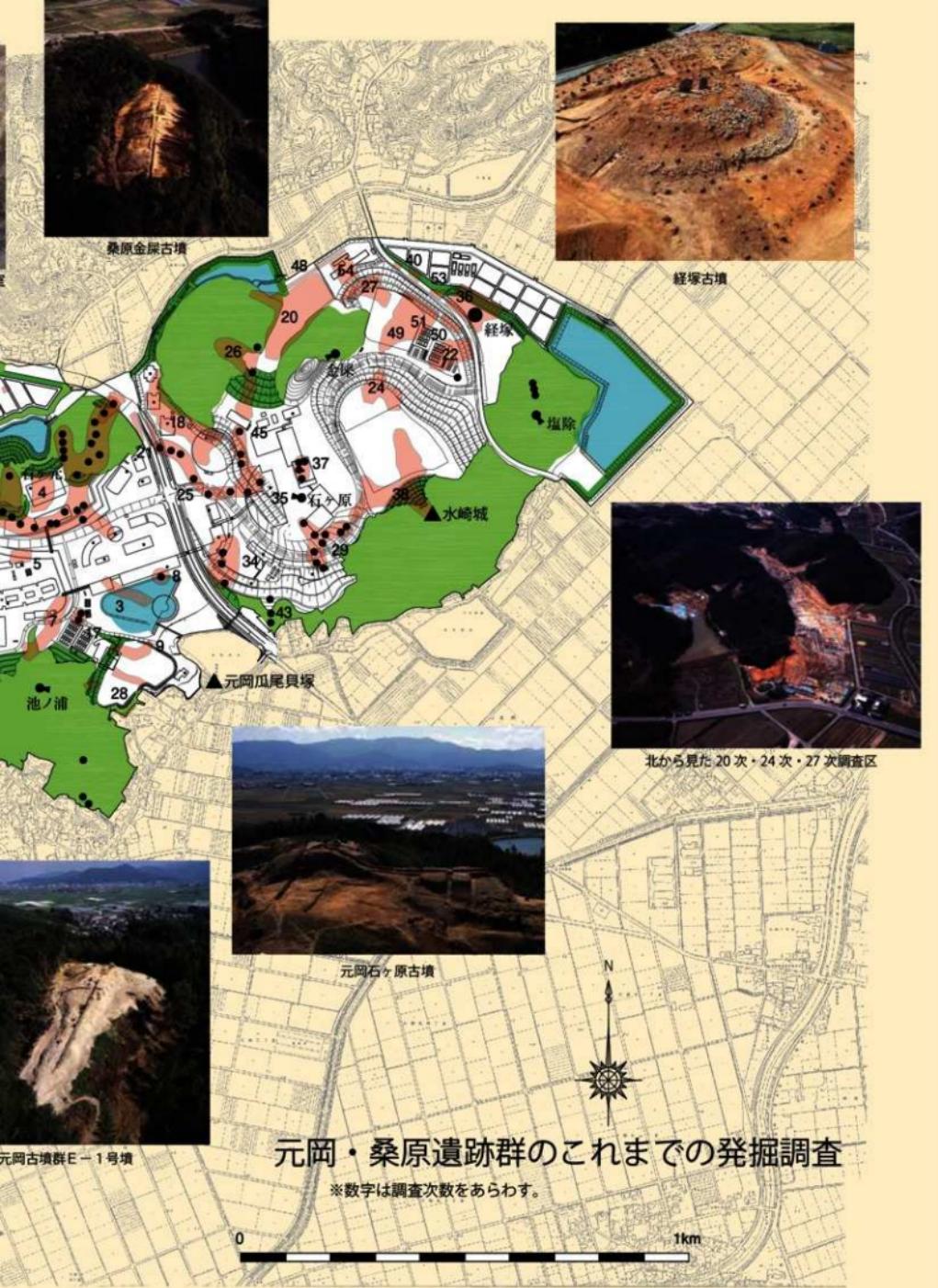
「吉備守年元年」と書かれた木簡。元や馬鹿、水船・水槽や弓矢、酒・米などの品や数量が書かれています。この箇には、それぞれの名物があつたからかをエラフクした時に付けた「印」も渡されていました。(13次調査)



(実物大)

となるのは西暦570年だけ。この銘文は刀が作られた時期を正確に記しているとともに、墨の知識を正確に使用した国内最古の例とされています。





発掘調査と最新の技術のコラボレーション！

～元岡・桑原遺跡群 56 次調査での活用例～

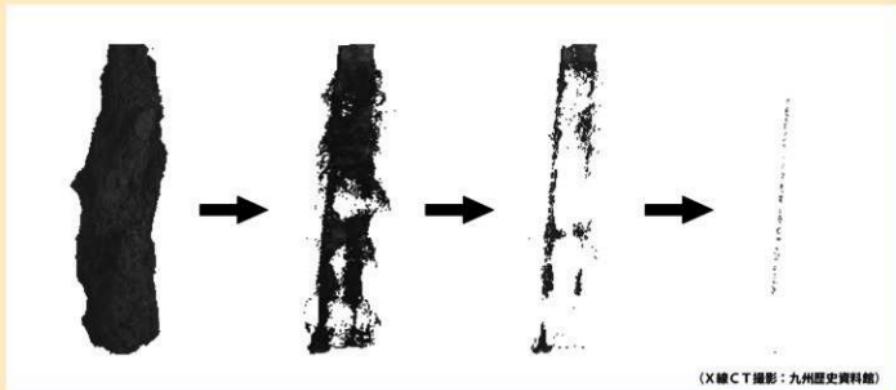


←元岡古墳群 G-6 号墳の石室を真上から見た 3D 画像。実際は石室の天井があるため、このような光景は見ることができません。VRだからこそ可能な写真です。

↓同じく元岡古墳群 G-6 号墳の石室の 3D 画像。石室を俯瞰することで、写真より立体感があります。



←元岡古墳群 G-6 号墳の石室のレーザー測量。石室内を 1mm 間隔で計測し、精密なデータを採取しました。



（X線 CT撮影：九州歴史資料館）

元岡古墳群 G-6 号墳から出土した唐實銘大刀の X 線 CT スキャン画像。医療現場で使われているものと原理は同じで、鍛びた金属の内部を立体的に見ることができます。今回の調査では、大刀のサビ落としをする前にあらかじめサビの厚さと銘文の位置を正確に把握することができ、作業を進める上で大いに役立ちました。

最後に

21 年間の発掘調査の中で、九州大学の関係者の方々、地元の元岡地区・桑原地区の皆様、各方面的関係機関、そして発掘調査にご参加いただいた多くの方々から多大なご協力をいただきました。ここに深く御礼申し上げます。